

## 📷 地域おこし協力隊の任命式 📄

📍 いわき市役所

📅 4/1(水)



### ＼駅前や中山間地域を盛り上げていきます！／

地域おこし協力隊は、都市地域から中山間地域などに移住した方を任命し、地域の特色を生かした商品の開発やPR、住民の方との交流を通じて、地域を盛り上げ、定住・定着につなげる制度です。

現在市内では、平・小名浜・遠野・小川・三和・田人・川前の計7地区に10名を配置しています。

新年度となり、新しいメンバーを迎え、任命式を行いました。各メンバーがいわきをもっと好きになり、地域に賑わいをもたらすことを期待します。

## 📷 いわき商業情報高等学校の開校式 📄

📍 いわき商業情報高等学校

📅 4/8(水)



### ＼新しい時代のイノベーターは君たちだ！／

旧・平商業高校と旧・四倉高校が統合した「いわき商業情報高校」の開校式が行われ、新しい校章と校歌が披露されました。

生徒たちは、県内初となる「IT科」をはじめ、四倉高校が取り組んできた実践的な企業実習を継承した「流通ビジネス科」など4学科に分かれて専門性の高い学びと技術習得に励みます。

ここで学んだ生徒たちが、未来のスペシャリストとして巣立っていくことを願います。

## 写真が語る「いわき」の歴史 手植えの結から田植機へ

いわき地域学會 小宅幸一

かつて田植えは家族だけでなく、親戚、集落中がこぞって作業に当たった大仕事となっていました。なにしろ、用水路から田に入れる水引きの順が決まっています。1軒でも遅れると集落全体に影響が及ぶからです。このことから、自然と遅れを避けるための連帯意識が働き、隣近所が手伝う「結」の慣習が生まれました。

結による一斉田植えが崩れたのは、高度経済成長下、工場進出が地方に及び、工場で働きながら農業を営む兼業農家が増えたからです。農家収入は増え田植機の購入が可能となって、手助けが必要なくなったのです。

平市は昭和41（1966）年5月、農業関係者を呼んで自動田植機のテスト会を開催しました。1度に2株ずつ田植えするのに10a当たりで約2時間半と、1人の能率の5倍の速さを示したのです。

昭和52（1977）年5月19日付『いわき民報』は「田植機の普及と性能向上で作業の省力化が進み、田植期間も大幅に短縮された。田植機を所有している農家は80%ほど。田植え期間も短縮され、70a前後の田植えに家族2、3人で4、5日かかっていたが、動力を使うと、1人が1日半で終わることができるというスピードぶり」と報じています。



■写真1 好間村における結による田植え

【昭和10年代 高木泰男氏所蔵】



■写真2 平中神谷における田植え

【令和4（2022）年4月 いわきジャーナル撮影】